

# 赤本「鼠の嫁入」にみる教育的 position と多様性

森 下 み さ 子

## 一、はじめに

従来、我国における絵本史は近代以降をとりあげ、諸外国からの影響・その吸収と展開に焦点があてられることが多かった。が、近代以前、私たちの文化は独自に子どもを読者対象に据えた絵本（草双子）を生みだしている。江戸は寛文（一六六一―一六七二）の頃より出現する「赤本」がそれである。さらに赤本は大人好みに趣向を交えながら、黒本・青本・黄表紙へと展開する。従来

の絵本史では概観しにくかった我国における「絵本を媒介とした子どもへのかかわり」をとらえるためには、これら草双子の誕生・発展に目を向けることが必至と思われる。

ただし、なかでも草双子の誕生期にあたる赤本は、その時代的古さもさることながら、子どものもてあそび物という特性にも災いされて残存する資料は乏しく、また文学的価値が低いと見なされ先行する研究も少ない。そこで、赤本の性格を探るにあたり、まずはその中から特長的なものとして「鼠の嫁入り」をとりあげ、ここに検

討を試みることにする。

「鼠の嫁入り」をとりあげる主な理由は、次の三点に負っている。

- 室町時代から江戸時代初期にかけて、鼠の登場する嫁入場面を扱った絵巻『鼠の草子』が存在し、赤本以前のものとの関係を見ていく上で貴重な資料と考えられる。<sup>\*2</sup> なお、両者の関係については小池藤五郎・瀬田貞二の指摘、及び小谷成子による場面の構成・書き込みからみた比較分析があり、それぞれ貴重な示唆を与えてくれる。<sup>\*3</sup>

○ 「鼠の嫁入」というテーマは、次に記すように赤本胎生期の行成表紙本に書名が見られるのをはじめとして、黒本・青本・黄表紙にもあらわれており、江戸を通じて好まれたテーマとしても重要な位置を占めている。<sup>\*4</sup>

○ 行成表紙本

『鼠の嫁入』

○ 赤本

『鼠よめ入』

『ねつみのどんくみ』西村重信作

○ 黒本・青本

『鼠の嫁入』黒本、鳥居清満画

『鼠嫁入雛形』黒・青本、富川吟雪画

『鼠嫁入蝠床』黒・青本、安永元年

○ 黄表紙

『鼠嫁入』安永七年

『鼠子婚禮塵劫記』曲亭馬琴著、歌川豊國画、寛

政五年

『鼠嫁入』内新好著、樹下石上画、享保三年

また、式亭三馬の『浮世風呂』に「私どもの幼少な時分は、『鼠の嫁入』やむかし咄の赤本が此上なしでございました。」とあり、赤本の中でも子女に好まれた中心的な題材と推測できる。

○ 江戸を通じて動物や化物などを擬人化して嫁入・婿入を表わした草双子がいくつか存在するが、中でも『鼠の嫁入』は古い資料である行成表紙本に書名が残

っていること、他の嫁入ものと比べて数もまざっていることから、これらの中心的資料と考えられる。次に「鼠の嫁入」の影響を受けていると考えられるものをあげておく。<sup>\*5</sup>

『狼の婿入』赤本、西村重長作

『隠れ里福神の嫁入』赤本

『鳥の嫁入』（仮題）赤本、西村重長作

『鶴の嫁入』（仮題）赤本、黒・青本、西村重長作

『化物よめ入』（仮題）赤本、青本

『狐の嫁入り』黒・青本

『猫嫁入』黄表紙、市場通笑著、鳥居清長画

以上述べたとおり、赤本のなかでも「鼠の嫁入」は、長期に渡って扱われた題材で、他の草双子への影響力も大きいものと考えられるのである。以下、赤本「鼠の嫁入」に焦点をあて考察を加えていくこととする。

## 二、赤本「鼠の嫁入」

現存する赤本「鼠の嫁入」には、次の二種類があげられる。<sup>\*6</sup>

①『鼠よめ入』二冊本、十丁、作者・刊年・版元不詳。国会図書館所蔵。

②『ねつみのゑんくみ』二冊本、十丁、西村孫三郎（重信）作、刊年・版元不詳。国会図書館所蔵。

①②の内容構成を表にして以下に示した。それぞれ画面に描き出された内容によって①は九個②は十一個の場面に分け、各場面にあたる丁数をその下に記入している。

内容項目	相当する場面と丁数	
	①	②
結納前	(1)一丁オ 祝儀前の掃除	(1)一丁オ 白鼠の尉と姥 (2)一丁ウ〜二丁オ 町茶屋での見合 (3)二丁ウ〜三丁オ 仲人による縁談話

結納の品々が届く	(2) 一丁ウ～二丁オ	(4) 三丁ウ～四丁オ
結納を届けた者の接待	(3) 二丁ウ～三丁オ	
化粧・着物の支度	(4) 三丁ウ～四丁オ	(5) 四丁ウ～五丁オ
荷送り		(6) 五丁ウ～六丁オ
台所で料理の支度	(5) 四丁ウ～五丁オ	(7) 六丁ウ～七丁オ
嫁入行列	(6) 五丁ウ～八丁オ	(8) 七丁ウ～八丁オ
婚礼式	(7) 八丁ウ～九丁オ	(9) 八丁ウ～九丁オ
出産・産湯	(8) 九丁ウ～十丁オ	(10) 九丁ウ～十丁オ
宮参り	(9) 十丁ウ	(11) 十丁ウ

結納前の場面は①②③内容が異なる他、結納を届けた者の接待の場面は④が、荷送りの場面は⑤がそれぞれ欠如している。また、⑥では嫁入行列に三画面を割いているのに対して、⑦ではそれが一画面に収められている。しかし、これらの差異を除けば、結納―支度―嫁入行列―婚礼式―出産―宮参りという婚礼に関する一連の経過を追っている点で、①②③の内容構成は一致していることがわかる。しかも、両者には主人公にあたる者が存在せず、物語の筋がないことも共通している。水谷不倒は、赤本

を昔咄やお伽ばなしをとりあげた「物語體」と、物語の筋は問題とせず何盡し、何揃えの形で一つのテーマに合わせて各画面を集めた「節用體」とに分類している。<sup>7</sup>この分類を借りるなら、「鼠の嫁入」は①②共に後者に属しているといえよう。鼠を使い、「嫁入」というテーマに即して様々な場面をつなぎ合わせたのがこの赤本なのである。

従って、次には「嫁入」のテーマに注目することとし、具体的に婚礼のことを説明したものととして婚礼式の解説書と女子用往来物を取りあげ、それらとの関係から「鼠の嫁入」の性格を明らかにしていきたいと考える。

### 三、婚礼に関する書物

江戸時代には、婚礼諸式に関して解説した書物が数多く出版されている。また、元禄の頃から広がり始め享保に至って目覚ましい発達をとげる女子用往来物の多くに「婚姻」に関する記述を散見することができるのである。

以下にそれらの内から主要な書物を年代順に記し、それぞれの内容・性格を略述する。<sup>\*8</sup>

書名・刊年	婚礼諸式に関する記述の仕方及び内容
女諸礼集 万治三 (一六六〇)	全六巻の内、三之巻「嫁取云入真草の次第よめ入の次第」四之巻「真の祝言の次第・草の祝言の次第」とし、結納・嫁入行列・輿入請取・祝言の様子を図示する。
女用訓蒙図彙 貞享四 (一六八七)	序に「……祝言は人の大式として此作法すくなからず、これによりてその品々の道具・躰方・風流の姿を記し集めて図にあらわし詞にのべ、女用訓蒙図彙と名づくるものならし」とあり、五巻をあらわす。内一之巻は嫁入の絵を付し、嫁入道具に因んで女子用の器財・衣服などを図示する。
女重宝記大成 元禄五 (一六九二)	全五巻の内二之巻を祝言にあてる。○祝言の次第(女は嫁して舅姑につくし夫を敬い下々をあわれむこと)○嫁取云入・日取の事○祝言道具の次第(行列・嫁迎えの様子を図示)○祝言座の次第(婚礼式を図示)他、女中よ

女源氏教訓鑑 正徳三 (一七一三)	ろづ喰い様の事などを付す。三之巻を懐妊にあて、出産・産湯を図示する。
女小学 享保十 (一七二五)	書のはじめに「婚禮之図式」と題して、婚姻の心構え・式の次第及び懐妊産後の事を解説。上下二段に分け上に解説、下に結納の図・輿入・婚礼・同草の図・平産・産神詣の図を描きいれる。
女中庸瑠箱 享保十五 (一七三〇)	下段2/3に女中庸を記し、上段に婚礼を忌む月日・嫁を新造という意味・胞衣のおさめ方を解説し、嫁入行列・婚礼式を図示。
絵本十寸鏡 寛延元 (一七四八)	上・中・下三巻。中巻を婚礼にあて、見合・結納・化粧・衣の支度・輿入・婚礼式をあらわし、解説を付す。下巻に出産・産湯の場面を描く。
絵本婚礼手引	「有識の武家方に御祝言ありし式法の写し」

<p>草 明和六 (一七六九)</p>	<p>「祝言の約束極りて云入のしるしの覚」と題し、結納・婚礼式の次第を絵にし、解説する。他、「女中たしなむべき事」「おはぐろはじめの事」を記す。</p>
<p>女要優小学 安永二 (一七七三)</p>	<p>下段に女小学。上段に「婚姻の和訓」と題し、婚姻の語義・心構え・祝言の由来・結納の来由・婚礼の式次第・懐妊出産に関する注意を記し、間に結納・荷送り・嫁入行列・台所・婚礼式・出産後の様子を图示する。</p>
<p>嫁入談合柱 寛政二 (一七九〇)</p>	<p>上・下二巻。○婚礼大意の事○日限談合の作法○算・嫁一生不忘事○母親嫁入お教訓の事○結納に古実ある事○仲人心得の事以下上中の身分に相応の式法を記し、結納・嫁入行列の図を付す。</p>
<p>婚礼罌粟袋 寛政七 (一七九五)</p>	<p>序に民用の婚礼仕用を記すとある。○結納の次第・いん物飾り直し様の図○算方結納内披露の事○目録紙の事認様の図○使者の心得・いん物並べ様○同目録差出す心得他、祝儀の衣類用立の事・嫁入道具の事など一九二項目に渡って列挙。</p>

<p>絵本婚礼道しるべ 文化十 (一八一三)</p>	<p>序に「夫女子は成長して人の家に行くものなれば心正しく、嫁ては夫につかへ舅姑に孝をなし……」とあり、以下祝儀の場面を絵にし、上部に解説をほどこす。○祝儀の場面。見合。結納の式。嫁入道具。嫁入の式。台所。祝言の座敷。色直し。部屋入の盃ごと。部屋見舞。算入図。若子出産。袴着を描く。</p>
<p>女今川教玉草 天保十四 (一八四四)</p>	<p>書のはじめに「婚礼式法之次第」と題し、町家の婚姻に関して、上段に解説、下段に見合・結納・化粧・衣の支度・舅姑盃床盃・懐妊・出産誕生・産神宮参を絵であらわす。</p>
<p>女大学操鑑 嘉永四 (一八五二)</p>	<p>下段に女大学を記し、上段に「婚礼式法指南」として、結納・式次第・床飾り・衣類の事を説明し、間に結納・化粧・輿入・婚礼式の絵を入れる。</p>

これらの書物からは、次のような特色が見出せるのではないだろうか。すなわち、

①『女重宝記大成』の○、『絵本婚禮道しるべ』の序にみるように婚礼の式法を伝えるに合わせて女子修

養の觀念を記している。

②女子用往来物においては、手習い用に「女大学」「女今川」「女小学」などを中心に据えながら、その上の段、或いは書物のはじめの教丁に婚姻に関する記述を付置している。

③表の内、『十寸鏡』『婚禮手引草』『婚禮道しるべ』は絵本であるが、絵本以外のものも婚礼に関する一連の場面を絵にあらわして示している。

④『嫁入談合柱』や『婚礼罨栗袋』をはじめとして、式の次第を細かく具体的に記している。

婚姻の習俗・礼式に関しては各地各様のあり方が慣習によって継承されているが、出版という伝播形体がようやく定着した都市においては「書物」という形をとって、婚姻の諸礼が伝え広められているといえよう。しかもその際、女子の嗜好として説かれていること、また絵や図を付し細かい解説によって、具体的・視覚的に式法が呈示されていることがうかがえるのである。

#### 四、「鼠の嫁入」の教育的位置

ここで赤本「鼠の嫁入」に目を転じてみると、次のことに気づかされる。すなわち、「鼠の嫁入」①②は婚礼に関する場面の経過を絵で綴っている点、婚礼に関する解説書や女子用往来物のあり方と重なる。しかも、①②にみられる各場面の図像は、これらの書物に含まれたものと非常によく似通っているのである。

赤本が解説書や往来物を模倣したとはいえないとしても、酷似する図像は、両者が何らかの共通性を担っていたことを示すのではないだろうか。同様の指摘は小谷成子によっても成されている。小谷は、「鼠の嫁入」②の絵師西村孫三郎が、女子用往来物『女今川錦の子宝』や『女用文章』にも筆を採り、そこに赤本と似通った絵を描いていることから、「絵師の側から眺めても、女子教育の書と『鼠の嫁入』とが共通の基盤に立っていたことがわかる」としている。<sup>11</sup>ただし、これら書物における絵

は説明を補充する形で置かれているのに対して、「鼠の嫁入」では絵が全面化され、しかも簡略な説明文さえ付けられてはいない。従って「鼠の嫁入」は、後には女子教育として発達するような内容を、鼠を使い、まず絵を見て楽しむことにより、幼い読み手にも享受しやすい形をとっていると考えられよう。

絵においては以上のような関係が指摘できるが、文字の上ではどうであろうか。前述したように「鼠の嫁入」においては、解説書や往来物にみられる説明文はなく、鼠一人々々がせりふを発する形で絵の中に文字が散らした対話をなしてはいないが、「目録にお引き合わせなされませ」<sup>\*12</sup>(①)(2)「これは荒塩酢の物にいたそう」(①)(5)「案内したか、ものもう声」(②)(6)「若殿様ができたで、おいらが幸せ」(③)(④)など、それぞれの発することばが、生き生きとその場の雰囲気を表わす働きをしている。解説書や往来物と違って婚礼の次第を知るには不十分であるが、絵と一体となって婚礼の持つ晴れやか

で賑やかな様子は、よりよくあらわれているといえる。

また、注目に値することは、次のような女の鼠のせりふである。

①(4)「すりつけにご用心ござんせな」

「三ぶばかり縫いこんでおかつしやい」

「急ぐ時は三遍歌をよんで裁つといひやす」  
「それは何という歌でござんす」

(7)「被衣のすそをおとりなされませ」

「口をきかずと眼八分に持って行かさい」  
「どなたから据えるのだ」  
「足元を見て静かに」

(8)「胞衣はこうするものだ。よう覚えてござい」

②(8)「お先静かに」  
「はいはい」

(9)「どふ据へやせう」  
「稽古したこと、もう忘れてか」

これらのことばはどのような機能しているものであろうか、①(4)三つめの会話を例に考察を試みることにする。これは、衣を裁つ場面で年上の鼠と年少の鼠が交わしているせりふである。この「衣を裁つ時三遍歌を唱える」



という作法は、次に例示するものをはじめとしていくつかの女子用往来物の中に見受けることができる。

へ衣を裁つ時の呪歌》

○天福皆来地福円満 一切諸願皆令満足

○千早振る神の教を我ぞ知るこの宿よりぞ富ぞふりける

る

○朝姫のをしへ初し唐衣裁つたびごとによるこびぞます

(『女用文章往らひ帳』『女今川千代見種』『女教訓手

持鑑』『女今川教玉草』『女大宝箱』など所収)<sup>13</sup>

これらから衣を裁つ時の障りを防ぐために唱えるべき歌が、女子教育の一環として伝えられていたことがわかる。「鼠の嫁入」のせりふはこの歌のことを指していると考えられるが、歌の文句は記されず、ただそのような教訓上の歌があることを会話の形で浮かびあがらせているにすぎない。他の会話にしても作法の内容を伝えるのではなく、そのような作法があることを知らせ、或いは思い起こさせる働きをしている。

以上のことを考えあわせると、「鼠の嫁入」は、女子用の教育書と同じく嫁入に因んで女子の嗜みを伝えることを意図しながらも、そこから内容を学ぶというよりはそれを一つのきっかけとする、すなわち女子教育に準じた役割を担っていたと推察できるのである。

## 五、「鼠の嫁入」の多様性

婚礼に関する解説書や女子用往来物と照らしあわせてみた限りでは、「鼠の嫁入」に女子用の準教育的素材の位置を与えることは不当ではないと考えられる。が、この赤本はその枠内におさまりきれない部分も多分に抱えている。次にそれらにも目を向け、「鼠の嫁入」を今少し広い視野からとらえてみることにする。

前述したように登場する鼠たちは、それぞれ思い／＼のせりふを発している。従ってせりふの中には、掃除に勤しむ者・台所で料理する者・嫁入道具をかつぐ大勢の奴・つきそいの腰元等の口から出たことが含まれてい

る。そしてそこには、先にとりあげたようなその場の雰  
囲気を如実に伝えるものや、女子の嗜みに触れるもの  
他に、次のようなことが随所にみられるのである。

①(5)「これを蒸したら酒も飲めやう」

②(6)「朝まで汁椀で飲むぞ」

③(2)「今夜の御祝儀は大方またぎづつくれるだろ  
うな」「そんなに聞くなよ。もらうことはかり  
いな」

④(9)「猫の災難逃れるやうに守りたまへ」

⑤(2)①「野良猫に見せても、千両道具じゃ」

⑥(2)「いよころせ、大黒のもうし子め」

⑦(3)「あなたがおきにいるさ山と見へる」

⑧(4)「きつい参詣、腰の巾着よりも化の皮の猫に用  
心、用心」

⑨(3)①「婿の筋目といひ、器量といひ、申し分はない  
が、五百両の持参望は胸につかへる」「五百  
両は御用達しのねづみ屋にて御借り、御借り」

⑩(2)「よふ茶を飲むそっぱめじゃ。晩には梁の上か

ら小便だろ」

①(4)「微塵齒形のない、よい金じゃ」

②(2)「落雁の鯛二枚、雛の節句に引いてきたのを知  
らぬが仏」

③(5)①「鉄漿付けたら、みそっぱとは見へやすまい」

④「よい齒じゃ。それではいかな米でもたまるま  
い」

⑤(2)「いいへ、わしや竹之丞ひいき」

⑥(3)「どふでも模様は光琳がよい」

⑦(7)「すこしうてた、刺身にはならすの森のほとと  
ぎす」

⑧(8)「かたづけ、かたづけ、かたづけとは紺屋の娘  
の一盛り、しんぞ一盛り」

⑨(9)「てんと吉原の初会の客じゃ」

⑩(4)①(9)・②(4)①④は鼠の大敵猫を、③(2)②は鼠がつかえ  
るとされている大黒天を登場させる。④(4)①は鼠の強靱  
な歯と小判を引くという俗信、②は鼠に付与される小さ  
な盗人という特性、⑤(1)はやはり鼠の歯とその習性を、

それぞれせりふの中に盛りこんでいる。これらは、登場人物を鼠に見立てたことで生ずる遊びであろう。

また、㊸(2)㊹(3)は、ことばの調子にあわせて「○○山の……」と続ける当時流行の縁語で歌枕の入佐山を嵌めたもの、(7)も同じく「成らぬ」という意味を「糺の森」にひっかけて「成らずの森のほととぎす」とつなげた流行のいいまわしと考えられる。㊸(8)は俗謡歌の一種と思われるが、紺屋の型付けと娘が嫁に片付くを掛けてでもいるのであろう。(9)は馳走をいたゞくだけの自分の居住まいを「吉原の初会の客のようだ」といいあらわしている。

①(6)②の「またぎ」は二百文を指し、(5)(6)のせりふは、料理人や奴の立場から見れば、嫁入も好きな酒を存分に飲め御祝儀をふるまわれる好機会、という世俗的な見方を映し出していると思われる。㊸(3)②も、縁談を持ち込んだ客にお茶を運びながらもらしている陰口を、それとなくせりふにしたてている。同じく(3)①のせりふは、当時の婚礼に関する記述から推し測れば、金銭のか

らんだ嫁入の裏の面を茶化していることがうかがえる。さらに、㊸(2)②の「いよころせ」は、歌舞伎役者にかけるほめことば、(5)②の「竹之丞」は市村座の人気歌舞伎役者である。同じ画面の「光琳」は、尾形光琳の画流にならって流行った衣の柄「光琳模様」を指していると思われる。<sup>21</sup>

こうしてみると、「鼠の嫁入」はその小さな画面の内に、ことばの遊びや世俗的な見方・茶化し・風俗・流行と、実に多彩な要素を含みこんでいるといえるのではないだろうか。前述したように、画面の内容構成やいくつかのせりふから、女子用の教科書につながる意図を内包していたことも確かである。しかし、解説書や往来物が女子を対象に婚礼の諸式を教え伝えることを目的としたのに対し、「鼠の嫁入」はそこから少し離れ、「嫁入」を一つの風俗とみなし、そこに遊びの精神を多彩に盛りこんでもいる。そしてそれは、婚礼の当事者に限らず、通りの者や使いの者のせりふをも画面に散らし入れる方法において、可能になっていると考えられよう。

## 六、結び

これまで赤本が子どもの読者を対象に据えているといわれていたが、どのような点で子どもを視野に入れているか具体的に示されることがほとんどなかった。この小稿においては、赤本「鼠の嫁入」を対象として検討することにより、婚礼の解説書や女子用往来物の流れとかわりながら、より幼い者にも享受しやすい形をとり、女子教育に準じたあり方をしていることが確認できた。また、それ以外の様々な要素にも注目することによって、「鼠の嫁入」の抱えている多様性を浮かびあがらせることになったのである。

これらのことを考えあわせると、赤本を幼い子どものもとのみとらえるのではなく、世俗に關けた大人をも対象に含めた幅広いものと考えた方が適していると思われる。女子は女子で絵を楽しみながら作法を学ぶこともあり、大人は大人で嫁入にかこつけて描き出される世俗

のことやことばの持つ裏の意味を味わう、一冊の赤本においてそのような状態が可能であったと仮定することもできようか。

当時にあつて赤本がどのように読まれ、またどのような働きを担っていたかは速断されるものではない。が、少くとも赤本「鼠の嫁入」が示しているのは、女子教育へのかかわりと世俗の多彩な要素が混合された形なのであつた。これが「鼠の嫁入」に顕著な特色なのか、それとも赤本全般、さらには黒本・青本・黄表紙にも通底するものであるのか、そしてまた、江戸という時代において草双子類に盛りこまれたものが何であつたかは、今後の検討課題としたい。

### 註

- \* 1 赤本の発生の時期は、宝永（二七〇四）とする説（水谷不倒「草双紙と読本の研究」『著作集第二巻』中央公論、昭和四八年）、貞享（二六八四）元禄（二六八八）とする説（小池藤五郎「婦女児童文学、赤本形態の研究」『国語と国文学』第九卷十一号）、寛文（二六六一

し」とする説(鈴木敏夫『江戸の本屋』中公新書、昭和五年)など諸説あるが、ここでは鈴木の説を引用した。

\* 2 絵巻『鼠の草子』には、天理図書館所蔵の一軸・断簡一軸、東京国立博物館の一軸がある。

\* 3 小池藤五郎『鼠の嫁入』と児童の心』『幼児の教育』フレーベル館、昭和十二年五月号

瀬田貞二『落穂ひろい』福音館、一九八二年

小谷成子『赤本』鼠の嫁入』とその意義』『愛知県立大学、説林29』一九八二年

\* 4 とりあげるにあたり、以下のものを参照した。

山崎麓『日本小説年表』・朝倉無聲『日本小説年表』・国書総目録・小池藤五郎『鼠の嫁入』と児童の心』

\* 5 山崎麓、前掲年表・水谷不倒、前掲書を参照した。

\* 6 正確な外題は不詳であるので、この小稿においては以下『鼠の嫁入』④⑤として扱う。④⑤共に刊年不詳である

が、⑤に関しては、小谷成子は絵師西村孫三郎の他の作品から推し量って『元文(一七三六)』から遅くとも安永期(一七七二—一七八〇)にかけての書であろうとしている。(小谷成子、前掲論文)

\* 7 水谷不倒、前掲書

\* 8 書物を選択するにあたり、国書総目録より版本の多いものに注目すると共に、以下のものを参照した。中山太郎

『日本婚姻史』春陽堂、昭和三年。江馬務『結婚の歴史』『江馬務著作集第七巻』中央公論、昭和五年。高群逸枝『日本婚姻史』『高群逸枝全集第六巻』理論社、一九七五年。石川謙『女子用往来物分類目録』講談社、昭和二年。なお婚礼の解説書と女子用往来物は、本来部類を異にするものであるが、ここでは婚礼に関して記したものと分類せず年代順に列記する。

\* 9 地方の婚姻習俗に関しては歴史民俗学の報告するところである。(例)柳田国男『婚姻の話』大間知篤三『婚姻の民俗学』有賀喜左衛門『婚姻・労働・若者』など。

\* 10 前記したように、それ以前に絵巻『鼠の草子』が存在しており、その図像との対応にも無視できないものがある。

\* 11 小谷成子、前掲論文

\* 12 以下、せりふの引用にあたっては、前記した内容構成を示す表より、当該場面の番号を付置する。

\* 13 関口富左『女子教育における裁縫の教育史的研究——江戸明治両時代における裁縫教育を中心として——』家政教育社、昭和五年参照

\* 15 鈴木棠三編『ことば遊び辞典』東京堂、昭和三四年

\* 17 『日本国語大辞典』小学館より『二百文をいう』駕籠かき・馬子や魚屋の符帳。』

\* 18

以下のものより、持参金目当ての嫁入が目についていたことがうかがえよう。——「近代の縁組は相生形にもかまはず、付ておこす金性の娘を好む事世の習ひとはなりぬ」西鶴『日本永代蔵卷五』、「今の縁組は先づ家筋よりも縁女よりも土産金の多少を論じ……」森山孝盛『賤のをだ巻』、「嫁娶并養子之儀に付而、貧たる作法不可仕事」寛文三年諸子法度及び「近世の俗婚を議するに、或は聘財の多少を論し、或は資装の原簿を論し……」武陽隠士『世事見聞録』（松尾美恵子「近世武家の婚姻・養子と持参金」『学習院史学』16、一九八〇年参照）

\* 20

『歌舞伎評判記集成』岩波書店、昭和五一年参照

\* 21

『日本国語大辞典』小学館より

\* 14

16・17・19 これらに関しては、中央図書館特別文庫の木

村八重子氏よりご教示いただいた。

